

# 廃仏毀釈を問い直す

国際日本文化研究センター名誉教授 末木文美士



願山神社の十三重塔。国重要文化財で、神仏習合時代の名残を感じさせる一筆書撮影

廃仏毀釈というと、お寺に群衆が押しかけて仏像を壊したり、経典を焼いたりというイメージで考えられるかもしれない。そういう面がなかったわけではないが、その運動を引き起こしたものに

は、維新政府の発した神仏分離令(神仏判然令)があり、そこには単に一時的な暴力さたでは済まない大きな変革が意図されていた。近世までは神仏習合が一般的なであったことはよく知られているが、その実態はしばしば誤解されている。神仏習合は、決して神仏が無秩序にごっちゃにされて、併を揮んでもよいといういいかげんな形態ではない。中世以後もっとも普及した本地垂迹説によれば、

神仏分離によって仏教は大きな打撃を受け、新しい体制の組み直しを余儀なくされるが、それ以上に日本の神観念が一変したことに注意すべきである。中にはお寺がそっくり神社に変わってしまった例もある。多武峰の談山神社(奈良県桜井市)は、もともと藤原鎌足の墓所として建立された妙薬寺という寺院で、藤原氏の崇拝を受けて栄えた。その中の聖霊院に鎌足を祀っていたが、それが神社となつて鎌足は祭神とされた。聖霊院という名は法隆寺や四天王寺で聖徳太子を祀る堂にも用いられている。太子も鎌足も同様に聖霊であったのが、鎌足だけ神となつたのである。

## 権力者や英雄 神格化の起点

根本である仏が日本の衆生を救うために仮に神として現れたのである。両者の関係ははっきりしている。多くの神社は寺院の管理下にあり、仏僧のほうに神官より上に位置していた。こうした仏教優位の形態に対して、それを逆転させ、神道の優位を主張する動向はすでに中世から始まっていたが、幕末の復古神道はとりわけ激しい

が主眼であった。それによって、仏教以前の純粹な神道に戻ることができると考えられた。そこで、各地の神社で仏像や経典を廃棄し、塔を壊すというような動きが一気に加速した。

もともと人間を神として祀ることとは、御霊(恨みを抱いて死んだ人の霊)以外にはなかったが、豊臣秀吉を祀る豊国神社、徳川家康を祀る東照宮以来、権力者を祀る神社ができた。それが維新とともに、南朝の忠臣楠木正成を祀る淡川神社をはじめとして、人を祀る新しい神社が続々と作られ、やがて靖国神社や明治神宮にもつながることになるのである。

## ばんがのミカタ



すえき・ふみひこ 1949年山梨県生まれ。東京大大学院博士課程修了。専門は仏教学、日本宗教学。近著に『思想としての近代仏教』(中公選書)など。

このように、明治維新は決して単純な近代化ではない。逆に千年以上も昔の律令制の原則に戻って、太政官と並んで神祇官を復活させ、祭政一致という超アナクロな政治を実現しようとしたのである。それ故、維新を政治的な側面からだけ見るのは間違いで、神道に基づく宗教国家が目指されていた。その体制は短期間で崩壊するが、神仏分離の方針は定着し、その後の国家神道の形成に結びつく。

1868年の「神仏分離令」に端を発した廃仏毀釈とは何だったのか。発生から150年に合わせて、仏教学者と美術史家に解説してもらおう。

次回22日